慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	「描くことの進化と発達の起源を探る：チンパンジーとヒトの幼児の描画行動から」(12月6日 三田キャンパス東館4階セミナー室)
Sub Title	Exploring genesis of evolution and development of drawing : the drawing behavior in chimpanzees and human children
Author	川畑, 秀明(Kawabata, Hideaki)
Publisher	慶應義塾大学グローバルCOEプログラム論理と感性の先端的教育研究拠点
Publication year	2011
Jtitle	Newsletter Vol.15, (2011. 3) ,p.5- 5
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	第1回 実験美学セミナー（第127回バイオサイコシンポジウム共催）
Genre	Research Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO12002003-00000015-0051

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

第１回 実験美学セミナー（第 127 回バイオサイコシンポジウム共催）

「描くことの進化と発達の起源を探る～チンパンジーとヒトの幼児の描画行動から～」

Exploring Genesis of Evolution and Development of Drawing —— the Drawing Behavior in Chimpanzees and Human Children

（12月6日 三田キャンパス東館４階セミナー室）

2010 年 12 月 6 日、三田キャンパス内で京都大学野生動物研究センターおよび東京藝術大学の研究員齋藤亜矢博士をお招きして、第１回実験美学セミナーが開催された。当日は本学内外より多数の参加者が集まった。齋藤博士は、京都大学霊長類研究所の天才チンパンジーとして知られるアイちゃんなどを対象に描画行動を実験的に研究してきた。同時にヒトの幼児でも同様の観察を実験的に試みている。

今回の発表では、齋藤博士が長年取り組まれてきた実験結果から、絵を描くことの認知的な基盤とは何かという大きなテーマについてお話いただいた。描画行動の進化・発達的な起源を、チンパンジーとヒト幼児を対象とした比較認知科学的な研究である。絵筆を器用に操作しながら具体的な物の形（表象）を描こうとしないチンパンジーと、なぐりがきから表象描画に移行する時期のヒトの相違はどこにあるのか。刺激図形を用いた課題からはイメージの想起や補完との関連が示唆された。

チンパンジーでも筆遣いのタッチや色の配置などの特徴、いわゆる画風のようなものがある。なぐり書きのようで、しかしそこには「個性」を感じさせる。しかし、チンパンジーは具体的な物を描くことはない。それを、齋藤博士は、線をひく手の動きを上手く調整できないという技術的な問題、何らかの認知的な問題、あるいは描こうとしないだけという意欲の問題としてとらえ、ヒトの幼児の描画行動と比較しながら明らかにしていこうとする。顔のパーツが欠けている線画に、どのように線や点を書き加えていくかをみる「画竜点睛」課題からは、チンパンジーの線を調整して描くための技術的な問題よりも、「ないもの」を補うことができない、という認知的な問題の方が関わっていることが分かってきたという。

チンパンジーとヒト。それらが進化的に分れたのは 600 万年ほど前だ。「描く」という行為から垣間見える心の進化とは、表象がどのように獲得されていたかということであり、その問題提起は、多くの参加者の心をつかみ、活発なディスカッションが行われた。（川畑秀明）

The 1st seminar on experimental aesthetics was held on December 6th at Keio University. Dr. Saito from Kyoto University had a talk about her studies on drawing behavior in Chimpanzees and human children based on comparative cognitive science.

講演会 Aesthetic Lecture on Shadow by Dr. Roberto Casati

絵画における影の描写

（1月25日　三田キャンパス6階G-SECLab）

2008 年に引き続き、哲学・文化人類学班では National Center for Scientific Research（CNRS、フランス・パリ）のロベルト・カザーティ氏を招聘した。氏は領域横断的かつ多面的に「影」を研究され、その著書のひとつ *The Shadow Club*（2000）は７カ国語に翻訳されるほど幅広い読者を得ており、現代を代表する「影」研究者の一人である。

この機会のために特に用意されたテーマは、美術史の文脈において「影」に注目する研究者として氏と深い親交をもつ文学部教授・遠山公一とのやりとりによって決定された。それは、絵画イメージにおける「正しく見えるが現実には誤っている影」と「誤っているように見えるが現実には正しい影」の指摘および認知心理学に基づく検証である。大抵の場合、われわれは絵画イメージに描き込まれた影を当然と思いがちだが、氏によれば、実はこれらの影には、現実どおりの正しい影と、現実には誤っている影が指摘できる。そもそも、影の描写は光・形・位置などさまざまな問題をまんべんなく解決した上に実現される、きわめて高度な技術である。したがって、描かれたイメージに現実との齟齬が生じ、そのわずかな誤りのために絵画の全体的な印象が損なわれてしまうことも珍しくない。とはいえ、影の描写が自然科学的に誤っていればイメージが不自然に感じられ、正しければ自然に感じられるというわけでは必ずしもないのだ。氏は、未だ明らかになっていない「影」の知覚のメカニズムを、前日に訪れたという浅草や浜離宮恩賜庭園で撮影した写真も実例として織り交ぜながら、体系的かつ実証的にご紹介くださった。

講演は２時間にわたり、その後の質疑応答もきわめて熱心かつ活発に行われ、２度の休憩時間は教員・学生問わずそれぞれの関心に基づいて個々に氏と意見を交わすことのできる貴重な機会となった。きわめて有益かつ濃密な時間を、来場者全員が共有できたと言えよう。氏は２月末にも来塾・講演されるが、今回とは視点を異にする新たな「影」がまたひとつ浮かび上がるであろうと期待される。（山根千明）

Dr. Roberto Casati, one of the representative researchers of shadows in the world, lectured on the newest problems of the shadows in visual images and the mechanism of their perception.